

not just about empiricities but about constructing more refined concepts to help us imagine well the apt scenario for the data. In this case, Saitta and Keene [1990] have long criticized this intuitive tendency to think that hierarchical equates elitism. In their view, centralized leadership does not axiomatically mean the destruction of egalitarianism; neither should hierarchical organization be automatically read as an elitism of power.

Between *IR*'s heterarchic reading and the hierarchy-emphasizing views of most chiefdom-framed studies lies the still open space for a tighter description of the range, diversity, and dynamics of non-state prehistoric Philippine political systems.

(Myfel Joseph Paluga · Department of Social Sciences, CHSS, University of the Philippines, Mindanao)

References

- Bacus, Elisabeth A. 1996. Late Prehistoric Chiefly Politics in the Dumaguete-Bacong Area and Central Philippine Islands. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 24: 5–58.
- Junker, Laura Lee. 2000. *Raiding, Trading and Feasting: The Political Economy of Philippine Chiefdoms*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Diamond, Jared. 1999. *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies*. New York: W.W. Norton & Co.
- O'Reilly, Dougald J.W. 2000. From the Bronze Age to the Iron Age in Thailand: Applying the Heterarchical Approach. *Asian Perspectives* 39(1–2): 1–19.
- Saitta, Dean J.; and Keene, Arthur S. 1990. Politics and Surplus Flow in Prehistoric Communal Societies. In *The Evolution of Political Systems: Sociopolitics in Small-scale Sedentary Societies*, edited by Steadman Upham, pp. 203–224. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nishimura, Masao. 1988. Long Distance Trade and the Development of Complex Societies in the Prehistory of the Central Philippines — The Cebu Archaeological Project: Basic Concept and First Results. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 16: 107–157.

林 行夫 (編). 『(境域) の実践宗教——大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』 地域研究叢書 19. 京都大学学術出版会, 2009, 836 p.

本書は、ビルマ（ミャンマー）からタイ、カンボジア、ラオス、中国南西部へと続く東南アジア大陸部の諸地域における宗教と社会の動態を、多角的な視点から明らかにした論文集である。編者である林が序文で述べているのであるが、本書は、従来、ミクロな生活世界の実践宗教は、国家あるいは制度といった枠組みの中で、二項対立的に中心に対する周縁あるいは外縁と、閉塞のかつディスクリートな他者関係のなかで捉えられることが多かったのに対し、実践宗教を、空間的な境界領域のみならず、制度的、文化的境界領域をも包含する「境域」という、いわば開放的、連続的で柔軟な関係性の中で捉える視点から照射し、その独自の生きざまを明らかにしようとしている点に特色がある、示唆的で挑戦的な論考集である。

評者は、これまでアイヌ、東シベリアのサハ、チベット系社会における宗教実践、あるいはその再活性化を研究対象としてきており、東南アジア地域については門外漢である。しかし、2007年4月に出席した国際宗教史学会のストックホルム特別会議では、「Religion on the Borders（境界にある宗教）」がテーマとなり、内と外、聖と俗、自己と他者など二項対立的に捉える視点はもはや重要な意味をなさないという認識のもと、宗教研究の新しい視点として「境界性」が照射されていたことを目の当たりにしている。また、本書が対象としている地域には、1970年代以降外国人の調査研究が事実上実施できなかった国や地域が含まれていること、とりわけ、国家の政治動向の中で宗教の断絶を経験した地域が含まれていることは、評者が調査をしてきたあるいは調査を進めている地域とも重なり合う。このため、本書は比較研究という点からも大いに関心をそそるものであり、ここでは他地域研究者の視点からという限定の上で、批評を試みるものであることをはじめに断っておきたい。

本書は、編者による序文、3部構成で配列され

た15篇の論考、および2篇の付録からなる。各論考はいずれも、長期間のフィールド調査にもとづく、厚い記述からなり、この地域における宗教実践研究の空白を埋める、宗教民族誌としての質の高いものである。しかも、本書のもとになる研究プロジェクトが、外国人の調査が制限される環境のなかで在地の研究者が参画して実施された共同研究であり、彼らによる3篇の論文は、在地研究者ならではの論考であり、資料的価値があるものとなっている。

まず、序文では、本書を貫く中心的概念となる「実践宗教」「境域」について、編者の定義が示される。本書の理論的枠組みは、第1に、宗教を、信徒の日常生活においてしばしば慣習として語られる、人々の身体に刻み込まれる宗教活動、つまり「実践宗教」という点から捉えることにある。第2に、このように宗教を捉えることによって初めて、特定の宗旨や国家、地域を越えて広がる、つまり「境域」にある信徒社会の連続性と断絶面の統一的理解が可能となるという点にある。つまり、宗教を、人々の日常性のなかに生きられるものという視点から捉え直す点に本書の特色がある。以下、各章において実証的に「境域」における実践宗教の動態が明らかにされる。

第1部では、とくに国家と制度に焦点が当てられる。まず、第1章から第3章は、カンボジア、ミャンマー、雲南省を事例とする宗教復興、再活性化の過程にみる動態を明らかにする。第1章は、ポール・ポト時代以降のカンボジア仏教の制度と実践の再編を、「僧と俗」という視点から分析し、カンボジアにおける仏教の再興過程が世俗による仏教秩序の直接的な統制、および出家行動を中心とする在俗信徒による「僧と俗」の往還という上座仏教社会の通常の論理によって支えられてきたことを明らかにする。第2章は、国家とサンガ（僧団）との関係の分析をとおして、国家権力による教理解釈の規範化、僧侶の管理統制など、現代ミャンマーにおける政治権力と上座仏教との密接な関係とともに、サンガと在家信者との関係性の中で独自の実践が維持されることを明らかにする。第3章では、雲南省南部の中国・ビルマ国境のムンマオ地区の事例をもとに、人々の間に慣行として根

強く残るローカルな信仰や宗教実践の共通性が時には国境を越える宗教ネットワークの形成を支え、仏教復興の力となることが明らかにされる。

続く第4章と第5章では、タイ北部の事例が取り上げられる。第4章では、タイ北部の国境域におけるシャン仏教の事例が取り上げられ、国家による宗教の統制は在家信者の仏教実践に対しては限定的なものにとどまり、彼らの間では土地の特性にうまく合わせた、制度化から自由な仏教実践が維持されることを明らかにする。第5章では、タイの東北農村における新興の実践集団であるタマカーイの事例をもとに、制度としてのタイ仏教と多元的な構造をもつ実践仏教であるタマカーイとの断絶と重なりがみごとに提示される。ここでは、国家政策の先鋒を担うようにみえる新興の実践集団といえども、その地方への浸透には、信徒が暮らす土地で規範化された行為や生活の感覚との同調が背景にあることがみごとに論証され、国民国家と直結する制度仏教のもつ虚構性が映し出される。

第2部では、東北タイ、カンボジア、ミャンマーの事例をもとに4篇の論考が、僧界と俗界の〈境域〉をテーマに実践宗教のもつ問題が論じられる。第6章は、在地の研究者による論考ならではの良質な地域研究モノグラフとなっており、東北タイにおける開発に積極的に携わる僧侶——「開発僧」——の開発への関わり方の動態的・歴史的過程、彼らの宗教にのみ限定されない社会的、文化的、政治的、経済的役割を実証的に明らかにする。

第7章・第8章は、従来、上座仏教研究では軽視されてきた女性による宗教実践の動態を描き出し、しかも、年配の女性たちが積極的に宗教実践に関わるという共通性を明らかにするものであり、この論文集の中でもユニークであり、女性と宗教性を考える上での貴重な論考となっている。まず、第7章では、カンボジア仏教寺院における、出家と在家の境域にある俗人女性修行者に焦点があてられ、彼らは頼りになる近親者の存在しない女性であり、自らの意志で持戒生活を選択し、経済的、精神的な自立を確立していくことが描き出される。第8章は、東北タイ農村における文化的イベントとして女性に謡われるサラバンという仏教讃歌に着目し、その成立と祭礼化の歴史を追いながら、

サラバンをめぐる宗教的文脈、女性の関与の変容を明らかにする。

第9章は、ミャンマーにおける「經典仏教」の近代から現代にかけての変遷を、その時々で重要な役割を担った僧侶に着目しながら丁寧に跡づけた論考である。ここには、ミャンマーの經典仏教が国家の体制や諸制度との相互作用の中で、「正統なる解釈」の制度化へと進む様相が映し出される。

第3部はアイデンティティの〈境域〉をテーマとする6篇の論考からなり、ミャンマー、タイ、雲南省、広西チワン族自治区の事例をもとに、宗教がアイデンティティにどのように関わるのかを明らかにする。このうち2篇は在地研究者による論考であり、第12章では中国雲南省徳宏州ドアン族における仏教文化と土着信仰の詳しい実態が描き出され、第14章でタイ・ムスリム社会の歴史と変化の現状が明らかにされる。

第10章は、非仏教系山地民ラフの事例をもとに、仏教国タイにおいて宗教的マイノリティとして生きる彼らにおいて、「宗教」が「他人の国」における自らの地歩を確保するための重要な要素となることを明らかにし、タイという国における宗教的・民族的共生の実態を浮かび上がらせるものとなっている。一方、第11章は、ミャンマーのカレン仏教徒における宗教実践の一つであるドウーウェー実践の事例をもとに、この実践が精霊信仰に近接するだけでなく、カレンの慣習を自己再帰的に指し示し、強調し、継承を促すメタレベルのメッセージになるというように、宗教実践の中に民族的アイデンティティが埋め込まれることを明らかにする。

第13章と第15章は、宗教実践が公共建築物の建造と関わる事例である。第13章では、西南中国の北伝仏教文化圏であるトン族における橋づくりの事例をもとに、功德を積むという行為（積德行）が公共の利便性の向上に貢献するものと強く結びつくことが明らかにされる。終章となる第15章では、中国雲南系ムスリム移民の例をもとに、イスラーム環境の形成過程が考察される。雲南系ムスリム・コミュニティが、モスク建築、イスラーム学校など宗教施設の設立をとおして、ネットワークの構築と強化を進め、自らの地縁的・民族的凝

集性を高めるとともに、ムスリム・アイデンティティを再構築していくことを、実証的に明らかにし、アイデンティティの「境域」における宗教の重要性がこの論考で再確認されることとなっている。

以上の15篇の論文によって提示された東南アジア大陸部における宗教実践の動態は、他地域における宗教動態と次のような共通点をもつものであり、本書は地域研究の枠を超え、その普遍性を示すものとなっている。第1に、宗教の再活性化において、国家などによる関与、制度化といった外側からの力が大きく関わる点である。たとえば、1990年代の東シベリアのサハにおけるシャマニズムの復興には、共和国政府による積極的な支持と後援があり〔山田 2002; 2007a〕、西チベットのラダックでは、ラダック仏教徒教会とダライ・ラマやチベット亡命政府との交流が宗教・言語上のより一層の標準化の背景となる〔山田 2009; 2010〕。第2に、宗教の再活性化の過程において、集団としてのアイデンティティの再構築の核として宗教施設が建設されていく点である。改革開放後のチベットにおいてまず寺院の復興が図られてきたし〔山田 2008〕、インドのチベット難民キャンプにおいても、寺院を復興し、寺院とのつながりをとおしてチベット人としてのアイデンティティが再強化されてきた〔山田 2007b〕。第3に、身体化された宗教活動が断絶後の宗教の再興に重要な役割をはたすという点である。サハやチベットのシャマニズムの再活性化において、シャマンの伝統的身体表現が人々の宗教性の喚起に重要な役割を果たしてきた〔山田 2005〕ことと共通するものである。

以上、本書は、「実践宗教」「境域」という枠組みを出すことによって、人々に生きられる宗教の柔軟性、展開性、超領域性、そして普遍性をみごとに描き出したものということができる。しかし、ここでは、国家、制度、僧界、俗界、アイデンティティの拠り所といった宗教を取り巻く、いわば外枠に関心の中心が設定されている。あまり掘り下げられていなかった「なぜ人々が宗教に頼るのか」「なぜ宗教の再活性化が求められたのか」という人々の宗教性については、今後の発展として大いに待ち望むものである。

（山田孝子・京都大学大学院人間・環境学研究科）

参考文献

- 山田孝子. 2002. 「サハにおける文化復興とシャマニズム・儀礼の復興」『東北アジア諸民族の文化動態』煎本 孝（編），319-356 ページ所収. 北海道大学図書刊行会.
- . 2005. 「現代化とシャマニズムの実践にみる身体——ラダッキとサハの事例より」『文化人類学』70 (2): 226-246.
- . 2007a. 「自然との共生——サハのエスニシティとアイデンティティ再構築へのメッセージ」『北の民の人類学』煎本孝；山田孝子（編著），61-94 ページ所収. 京都大学学術出版会.
- . 2007b. 「チベット難民社会の大僧院が担う新たな使命——セラ・ジェ僧院の事例より」『北方学会報』12: 81-96.
- . 2008. 「チベット，アムド・カム地方における宗教の再活性化とチベット仏教僧院の存続に向けての取り組み」『北方学会報』13: 4-12.
- . 2009. 『ラダック——西チベットにおける病いと治療の民族誌』京都大学学術出版会.
- . 2010（印刷中）. 「『移動』が生み出す地域主義——今日のチベット社会にみるミクロ・リージョナリズムと汎チベット主義」『地域研究』10 (1).